

2021(令和3)年5月発行

都歴研

友の会だより 15号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
電話・FAX 042-591-1853 ホームページ [http:// rekishitomonokai.sakura.ne.jp](http://rekishitomonokai.sakura.ne.jp)

コロナ禍、いかがお過ごしですか

『会』を閉じる前に

東京都歴史教育研究会友の会
世 話 人 会

第14回総会と
史跡見学「鎌倉NewWaveを訪ねて」

再延期のお知らせ

コロナ禍の中、いかがお過ごしでしょうか。

昨年4月、総会をはじめとする諸行事の向こう1年間の凍結延期をお知らせしましたが、以来はや1年。新型コロナ covid-19 とその変異株の蔓延状況は収束の兆しを見せるどころか益々拡大の一途を辿っております。ワクチン接種が進めば会合や旅行も可能になるかと考えましたが、それも今や期待薄です。解散総会に当たる第14回総会と史跡見学「鎌倉NewWaveを訪ねて」は再度延期せざるを得ないとの判断に至りました。

第14回総会は、来年、2022年の6月に、「鎌倉NewWaveを訪ねて」は2022年5月18日(水)と致しました。それまでには高齢者3600万人へのワクチン接種が完了していることを祈るばかりです。

昨年7月の『友の会だより』14号は部数を減

じて発行致しましたが、会員の皆様からの「コロナ禍の中で」のお便りも頂いてから既に半年以上を経過してしまいました。解散記念号と銘打った15号の為に寄せ頂いた数々の原稿は想定ページ数50頁を超えて印刷製本作業が難しくなったこともあり、今回、お便りと原稿の一部とを15号としてお送りし、その他のいただいた原稿は次回総会の前、2022年6月初めにもお届けしたいと考えております。ご了承ください。

最終号原稿 さらに募集

友の会だよりも1号伸ばすことになりますので、最終号16号に向けて、重ねて原稿を募集します。2022年3月末までにお寄せください。

主な内容

コロナ禍のなかで——近況はがき一言集	2
古い地図で旅する	(滝沢 順) 6
エトルリア人を追いかけて	(村木逸子) 7
普陀山・天台山紀行	(小澤拓美) 12
チベット仏教の寺院・聖地を訪ねて	(増田克彦) 15
幕末の村、感染症とのたたかい	(重政文三郎) 22
会員の著書紹介	24

コロナ禍のなかで

都歴研友の会 会員の皆様

「一言集」執筆のお願い



来年発行の「友の会だより第15号（最終号）」にむけて「コロナ禍のなかで」をテーマとして、皆様の「一言集」を掲載したいと思います。

コロナ禍は、世界的規模で、だれもが受けている現在進行中の災難です。政治家や著名人の日常は資料に残るにしても、普通の人々が何を考え、どう過ごしたかはなかなか歴史の史料として残りません。過去を振りかえっても、大正期のスペイン風邪を庶民がどうとらえていたのか、ということは当時の新聞でもあまり浮かんできません。今回も、ネットではいろいろ書かれています、文字情報として果たしてどれだけ後世に残るか疑問です。

庶民の日常を後世に残すことも、私たちの責務と思います。そこで、会員の皆様のこの間につきまして「コロナ禍のなかで考えたこと、コロナで変わった私の生活、コロナで一番困ったこと、コロナ禍のなかで感動したこと、コロナ在宅で読んだこの本」など、ご自由に書いていただけませんか？

同封のハガキにて、9月末日までにお送りくださるようお願いいたします。

(いただいたはがきをそのまま、編集部へ到着順に掲載します。)



「第2波か」と言われるコロナ禍の中で

新型コロナウイルスの感染が取り沙汰されてから半年以上が過ぎた。依然として感染の収束が見通せない状況である。このウイルスについてはまだ不明なことが多く、今のところ根本的な対処策も見つかっていないようで、世界中が悪戦苦闘しているようだ。文科省の自書で「教育再生」に向けて「正解のない課題に挑戦すること」が謳われていたが、妙に納得してしまった。

さて我が身に照らせば、呼吸器系の軽い持病を抱えていることもあり、とにかく感染しないように気を付けて生活してきた。日用品・食品の買い出しと体験農園での野菜の世話以外には極力外出を避けている。立川の片田舎では人混みはほとんどないのだが……いわゆる「巣もり」状態をいまだに続けているので、残念ながら「コロナ太り」になってしまった。が、医療的な「正解」が出るまで、エッセンシャルワーカーの方々に感謝しつつ、これからは「巣もり」生活を続けるつもりである。

2020年7月26日記 日下部 公昭

コロナについて—少しSF的に—

コロナが終息したのであればその評価をすることが可能かもしれないが、現在進行形であり予測もつかない中でこの一言集の厚稿を書いている。元教員としては近代科学が感染症を克服してまた歴史を子どもたちに教えるのであるが、現実には必ずしもそうなるとは限らない。人類が滅亡しウイルスの星になったとしても、宇宙全体としては別に困る話ではない。そのうちワクチンが作られようであろうが、その時にはコロナも変異しているであろう。コロナにいかにも勝つわけではなく、いかに負けるかの時代にはいったと思われよう。藤井聡太は、AIに勝っても、コロナには勝てないであろう。我々は、Go to-----ではなく Back to-----の発想で、生活様式をどう直す時が来るとは思っている。

2020年正月、新春浅草歌舞伎の観劇に浅草公会堂に妻と一緒に。仲見世は人でいっぱい。中旬には弟の奥さんの三回忌に夫婦で参加。弟の小さい孫も法事に参加していた。この頃、都歴研の千住宿巡検中止の連絡がくる。二月、三軒茶屋の世田谷パブリックシアターに観劇に行く。途中の地下鉄、劇場内でもマスクをしている人は数人しかいない。三月、母の法事。息子の嫁と孫は、感染予防のため不参加。殺菌・消毒剤は薬局で買えなくなり、コンサート・演劇などの休演があいつく。四月に緊急事態宣言が出されるが、遠出するとき、いつも弁当持参で車での移動、人との接触はトイレのときくらいなので、毎日の生活はいつも変わらず続いている。ただ、このコロナ騒ぎの中で、マスコミは政府や都庁などの発表にのって横なぐりの報道ばかり。戦前の政府・特高警察、戦後のGHQによる統制に続いて、今は政府と電通による統制で、報道管制が徹底し、統制されていること感じさせられる。恐ろしさを感じようになった。矢島

新型コロナ禍で考えた事

中国で発生した新型コロナウイルスは瞬く間に世界中に広まった。日本では空と海との水際で阻止を図ったが阻止できなかった。このウイルスは未知の部分が多くワクチンや特效薬は無い。感染者は小さな一方に検査器具も患者を収容する病院も隔離すべき患者をねりおさすも不足という状況下で、昼夜分かたず治療に当たられる方々へ先ずにかう敬意を表したい。その後医師や看護士に感染が拡大の医療崩壊の寸前になって政府は緊急事態宣言を出した。これは感染拡大抑制が目的だったので、すべて果敢に学校・休校・飲食店や商店は休業・営業時間の短縮・外出の自粛など市民の日常生活に支障を来す要請が多かった。経済上のこともあって感染数の減少につれ徐々に規制は緩和され、街に人が戻った。特に夜の繁華街は活気を取り戻したが、そのうちの6割近くが20代・30代の若者が占めた。戦後の青春時代は戦中・戦後であり戦中は物資が不足していたが配給制で何とか渡り、戦後食糧難により占領軍の支配下だったのですべて検閲され、自由にならなかった。それに比し、彼らが育ったのは豊かな物に恵まれ、何と自由がない環境だった。このころ日本では大なる自然災害が続いている。学校や職場では定期的に避難訓練が行なわれている。それも事柄が早い事に遭遇した時の辛さに耐えて生き抜く力をつける教育が必要ないかと考え、筆にためた次第である。

安蔵 玄洋

コロナ禍のなかで

◆感染地獄・灼熱地獄に陥っている今日。欲望のままに資源を消費し、海を越えて遊んできた人類社会、迷惑だらけ。◆川生、相がわかる。週3の勤務を楽しんでいます。24時間営業の知的障害者施設ゆえ、休業はありません。60歳代の大学勤務掛け持ち時を含め、勤務13年目です。マスクは支給してくれるが、教員引率に丘歩きに行く時の駐車場閉鎖には困りました。◆このところ毎夏は北ア・ハケ岳等の山旅をしていましたが、これも山小屋閉鎖で困りました。暑夏に閉鎖しながら、奥多摩の旭山歩きをしています。◆本の買い方が変わりました。紀伊国屋等に行かず、ネット検索に近くの書店注文にしました。今まであまり読まなかった地学本を買うことが多くなり、夜空を眺める楽しみが増えました。◆1万年・10万年後など未来の地球に想いを馳せることが多くなりました。未来の人類あるいはそれに代わる高等生物は、国会図書館に保存された20・21世紀の記録をどのように読み解くのだろう。妄想とめぐる日々が続きます。

2020(令和2)8・15 小澤 拓美

自筆はご勘弁を。齢のせい、読むのも書くのも長続きしなくなりました。さほど読んでいる訳でもなく、傘寿記念で親族へ送る予定の、15年前に出した父方母方双方の系譜書『素柳、耕生、そして私』の『補遺』執筆作業も遅々として進んでおりません。

コロナ騒ぎも既に9ヶ月。2月25日の新宿の居酒屋での「三密」の飲み会の後は、国内外の旅行は勿論、コーラス、埋蔵文化財関連はじめ、あらゆる会合・飲み会など全く無く、一人で飲みに行くことも、夫婦で外食することも無し。ミニバスで買い物に出るだけの日々。友人の葬儀にも出られず。

特效薬もワクチンも無い今、全員を検査し、陽性の者は全て隔離。その繰り返しという至って単純なことがなぜできないか。我々の税金の馬鹿々々しい程の無駄使い。

増税と一層の社会的経済的格差拡大の気配。やはり政治だと思いつくと思う今日此頃です。

2020.9.15 増田 克彦

例年五月の連休の頃は、私の趣味である エビネ栽培の開花期にあたり、一年の中で最も忙しい時期となりま
す。レイル、今年はコロナ禍のため、花友と往來もでき
なくなり、自らの花の世話をするしかありません。三
三日鉢程あるエビネの植え替えと、今年は全て行うことが
できませんでした。
また、エビネの実生苗を、納得の行くまで今間をかける
ことになりました。
エビネは、播種から開花まで最長で五、六年は必要
とします。こんな花が咲くだろうと想像しながら交配をす
るのです。結果がわかるのは五、六年後ということになりま
す。播種時には是非、新花と確認したいものだと思
っています。それには五、六年長生きしなければなりません。
このエビネの交配を続けて行くと一体私は何才まで
生き延びられるでしょうか。……

池田 山石 田刀

今、私はサ・高・住（サレヒス付き高齢者住宅）と言われ
る所に住んでいます。入居者は七十五才以上で六十一人います。
この様な所です。外に出てコロナ菌を持ち込んでは
す。大勢の人がかわりクラスターが発生する恐れが
あります。そのため三密は守るよう、外でも自粛するよ
う言われております。好きな旅行にも行けず、食事に
も制限は多くあります。
親族の見舞も予約して十五分間、その上自室には
入れません。この様な毎日は読書三昧だった生活も出来
なくなりました。
今は都歴研の皆さんとの見学会や旅行したことも
懐しく思い出してしまいます。そして、一日も早くコロナ禍が終
息することを願っております。

藤澤 美恵子

令和三年下旬頃から新型コロナウイルスの脅威が
高まり、3月には都国からマスクの着用を密を避
け不要不急の外出は自粛すまよう要請がある。
高齢者、若者はマスクの着用以外は、外出の
生活スタイルと殆ど変わらない。5月主人が持病（
肺血管狭窄症、圧迫骨折）が再発し、もう
は松葉杖無しに歩けず、生死のハシリで自力
で歩けるようになった。8月、コロナの影響はあ
るが、政府の緊急事態宣言と、高校・
大学の同期会・同窓会、友人夫婦の会、演奏
会等の中止や延期のみ知らせが、週二回
通りかすの人教制限により番札を取るか
に、早目に家を去る日々、これは矢張りコロナの影
響であるとは確信。並ぶと慣れこま、
高齢者で東京人々と持病のある者は身が縮
み……。

マコ・カン

コロナ禍の中で思うこと 2020・9・28

すでに後期高齢者となった私は、毎週1回程度の趣味の古文書サークルの例会がほとんど開けず、史料をみんなで読み進むという「仕事」がはかどらなくて困っている。これまでに読んだ村の日記の解説文の整理、会紙編集の仕事、これに載せる文章づくりに日を送っている。自粛で外出もままならずまるで「コロナ休暇」だ。しかし世間では、コロナ禍が確実に日本経済をむしばんでいる。失業者は増え、それも非正規労働者が多いという。いまや労働人口の半分を占める「非正規」「派遣」は賃下げ可能な制度として作り出され、そこをコロナが直撃した。感染症は日本史上でも繰り返した。江戸時代の村人の感染症との戦いは古文書の日記からも読み取れる。コレラはペリーの黒船と共にやってきて村でも大流行した。村人は般若心経で祈ったり村境で鉄砲を撃ったり、呪（まじない）の文字を門口に掲げたりした。一方天然痘も流行ったが、こちらはワクチンとしての「種痘」が長崎にもたらされ村でも子どもたちに接種された。はじめ幕府は蘭方医学の種痘を認めなかったが、村医師の努力があつて普及した。村の日記には西洋医学への驚きと賞賛の言葉も記されている。感染症の流行とその時々政治の関わり方を思う。重政文三郎

思いの伝へ 小宮進

- 2020.1.23. 中国は武漢市(湖北省人口1千万以上)で大流行の感染症の流行阻止のためロックアウトした。病原体は当時の細菌研究所から出たとか報道に私は中国の細菌兵器の研製を直感し慄然とした。
- 世界的展望の感染症は黒死病(14c-18c)。最終期(14c中期)全欧人口の60%(5千万人)が死した。病や鼠の侵入には鎖国したカトリック職員の努力は空しく、後の権威は米騒動や幕府の失敗を重くして国王陛下の専断制国家の移行加速した。第一次世界大戦中のスペインは1918-1919は世界人口約18億(現約77億)中、約6億人が感染、死者は4千万〜1億人。第一次大戦の死者1700万人より遥かに多く、兵士の戦意を喪失させ、諸国は戦争継続を断念させ、病気はアメリカのカンサス州陸軍基地の病院から戦時機密。当時、流行を公表している中国スペインに署名を付けたと後日確認された。そして国際機関の設立、女子人権の向上、新資本主義や社会主義の国家の誕生と新時代創設の一国となっている。
- 新型コロナと対するスローガン三原則は元来社会的人間である人間生活には合わない。なるべく早く新しい時代作りが必要である。そこで私は一句

三密にやっくとうわく百日紅
ハチ 芭蕉 (望南子)
ハル 十梓

● 情報の量は、ポストや威光(関係本や雑誌)ネットやテレビで情報を得る。デジタルの「ポスト」は1665年のロンドンのポストに付いた記録であった。芝居會社の酒場は営業禁止。今と同じことが行われていた。市当局の対応は現在の日本政府や東京都の対応よりレバリしていた。

● 新しい生活様式の恩恵にあずかる。
Zoomなどの会議・講演会に参加。
自宅を出来て大変便利
Netで通信で韓国ドラマは観た。Netflixで見れる。
隣国の現状は生活スタイルはよくわかる。
DVDはアマゾンから安く映画をよみ取る。

● 日本人の同調圧力の強さは、異常だとみられる。
「年寄りはおろかな」の圧力には屈しない。
病院も整骨院もスポーツ施設に行かずに家でいて、いつもマスクに運ぶ。
7月以降は若干の工事や新館、自由丘、原宿、八王子、出町、人並み次第に増えていくのを見る。
「ハニエリ」「ロニエリ」はしまわぬでした。

● あいはい政府対応に抗議に「安倍政権の野郎」のステッカーはより増えていた。(1/4/21)

2020年2月に南インドとデカン高原(当時インドはコロナ感染者がゼロだった)にツアーで行って以来、単独リ状態を続けています。体力がもともと衰える前に海外旅行や城巡りに出かけたのですが、現在は海外旅行は無理です。国内旅行は再開されたので日本城郭協会が選定した「続日本百名城」を巡るつもりだと思っています。私は現在までに「続日本百名城」のうち5つの城を訪ねたのとあと45の城が残っています。残っている城は山城が多く、津島や五島列島や沖縄に城が残っているのが大変です。単独の間はパソコンでこれまで行った海外旅行、国内旅行の記録をまとめています。これからヨーロッパの個人旅行とインド旅行の記録をほめておきます。高原特

古い地図で 旅する

滝沢 順

切手市場で古い5万分の1の地形図「川越」を購入しました。明治44(1911)年測図、昭和14(1939)年2回目の修正をした図です。

南西の所沢方面から川越駅(現本川越駅)を目指すのは旧西武鉄道(現西武鉄道新宿線)です。西武池袋線は図には現れませんが、当時は武蔵野鉄道です。両鉄道は合併して西武農業鉄道を経て、昭和21(1946)年に再度西武鉄道を名乗りました。

旧西武鉄道の前身の川越鉄道の時代から国分寺～川越間に鉄道郵便車を走らせ、丸一型・時刻入

型・右書鉄郵印などが使われました。

南大塚駅から西北へ安比奈線が伸びています。この路線は入間川で採取した砂利を運搬するために大正14(1925)年に敷かれましたが、砂利採取規制によって昭和38(1963)年に休止扱いとなり、平成28(2016)年に正式に廃止されました。

川越西町駅は東武東上線の駅で、この路線でも東京～寄居間の右書・左書の鉄郵印が使用されました。

国鉄川越線(大宮～高麗川)は未成線として記載されています。この路線の開通は、昭和15(1940)年で、この地形図の修正発行された翌年のことです。

国鉄川越線が開通すると川越西町駅は川越駅になり、旧西武鉄道の川越駅は本川越駅に変更されました。お上ファーストの時代の変更ですね。

国鉄川越線は昭和60(1985)年に電化されました。この時大宮駅では珍しいタブレット形の記念入場券を発売しました。

こうして「地図で旅する」と興味深いことが次々と出てきます。



エトルリア人を 追いかけて

村 木 逸 子



1 はじめは「ヴォルテッラ」

世界史の教科書に「ラテン人の勢力の一つローマは、はじめエトルリア人の支配下にあったが、前6世紀にエトルリア人の王を追放して、自己の都市国家を樹立した。」とあり、記憶にのこる民族名であった。イタリア・ピサ出身の女性と息子が結婚し、挨拶かたがたピサを訪ねたついでにピサの周辺の都市や遺跡を案内してもらったのは2003年。その中の一つに「ヴォルテッラ」という町があり、そこには「エトルリア博物館」がある

ということを知り、案内してもらった。

＊ ＊

ヴォルテッラはピサから東南の

位置にある丘上都市であった。イタリア各地には山の上に小さくまとまった町が多いことを後に知ることになるが、旧市街地への入り口にあたるアーチ型の城門の脇にエトルリア時代の城壁が残され、第二次大戦中はドイツの攻撃から城壁を守るために市民が色々な工夫をして守り抜いたという説明のついたレリーフ(左写真㊤)があった。

㊤の写真は、この城門にのぼってくる途中に見かけたローマ領になってから造られた劇場の遺跡である。町が城壁の外側に拡張され平坦な土地につくられており相当規模の大きな劇場である。

上の地図で赤く示した州の名はトスカーナ州、ピサやヴォルテッラはその州にあり、州都はフィレンツェである。

州の名の「トスカーナ」は『エトルリア人の土地』を意味する。由来はローマ人がエトルリア人を Tushi または Etrusci と呼んだことにあるという。

イタリア半島の西側にある海を「ティレニア海」と呼ぶ。この海域にきていたギリシャ人が「ティレニア人と交易した」と記していたことに由来する。エルバ島がその海域にある。



㊤エトルリア時代の城壁にあるレリーフ

㊦ローマ時代の劇場の遺跡



トルリア人の子孫』という人もいるという。ローマ（ラテン）人より古い民族であるという自負の気持ちが込められているのだろう。

上の地図はエトルリア人の支配地域を示している。紀元前8世紀には濃い色の地域、南は建国時代のローマに及んでいる。

エトルリア人の勢力が強かった紀元前8世紀～5世紀には、北はポー河を越えてマントバに及び、ガリア人（ケルト）と接していた。ボローニヤなどでもエトルリア人の墓などが発掘されているという。

「エトルリア12都市同盟」といわれる主要な都市が大きな●で示されている。今も残る都市としてはタルクイーニャ（友の会の旅行で訪ねる）やウンブリア州の「ペルージャ」が有名である。（後述）

紀元前8世紀の初めにはギリシャ人、フェニキア人の船が海岸に姿を見せ、交易活動が始まり Fufiluna 等の海域に出来た都市では、階級社会が成立していたことが墓の規模から推定されている。

これらの海の方の都市には船乗り、鍛冶屋、鋳

山での採掘に従事する人が現れているが、ボルテッラなど海に遠い地域では農業が中心で、ある程度平等な社会構造であったことが墓から推測される。

ヴォルテッラには、紀元前6世紀末～5世紀初めには、約25,000人が住んでいたと推定される。前4世紀にはケルトの攻撃を受け、前3世紀初めにはサムニテ人都市と同盟しローマと戦ったが敗北し、前205年にはローマの同盟軍として第2次ポエニ戦争に参加している。前90年には他の同盟都市同様ローマ市民権を与えられた。

しかし、紀元前2～1世紀の内戦期のローマで、マリウスとスラの抗争時には他のエトルリア人の都市と共にマリウス派につき、スラ軍に2年間包囲・占領され敗北した。結果として、ローマ市民権を失い市民の土地はローマに没収された。この内戦時、城壁やアーチ門は破壊されたが前1世紀に修復されている。写真にある「ローマ時代の劇場址」からはローマ化された都市となったヴォルテッラの繁栄が想像される。

ボルテッラには「エトルリア博物館」があり、ネクロポリス（お墓・現在も発掘中）から発掘された柩を陳列した部屋が数多くあった。エトルリア人の柩には埋葬者の彫像が蓋に彫りこまれ、彼らはベッドに横たわる形をしており、死後の世界で悠々と生活しているように見えた。骨壺は今もボルテッラの特産品であるアラバスターで細工さ



ボルテッラのエトルリア人の墓所

れたものやブロンズ製のものが多い。エトルリア人は鉄の利用にも優れ、用具や装飾品についてはボルテッラ出土と同様のものがボローニャ等の北部の都市跡からも発掘されており、交易活動も活発であったことが想像された。(数年後訪ねたエルバ島が鉄の主要な産地であったことがわかった)

2 世界遺産「タルクーニャ」で エトルスキーの美少年に会う

「イタリア人の中にはエトルリア人の墓や遺跡を訪ねるのを趣味にしている人が多くいる」ということを聞き、本もいただき、エトルリア人への興味が湧き秘かにエトルリア詣をすることにした。

2008年「東京都歴史教育研究会「友の会」でイタリア旅行を企画した時に観光会社のツアーのコースと同じでは物足りなく、幾つか独自プランを入れたが、ローマからピサへの移動の途中に「タルクーニャ」をいれることにした。タルクーニャはエトルリア12都市同盟の一つであり、遺跡は世界遺産に指定されている。

タルクーニャはローマの北西部にあり、この地域にはエトルリア人の都市が数多くあった。紀元前8世紀の頃に始まっている。

タルクーニャでは広々とした野原の下に地下の墳墓が保存され、私たち観光客も地下に降り、墓の壁画を見ることが出来た。壁画は素晴らしかった。

この地域の墓が誰の墓であるかはが分かっているものもあり、紀元前6世紀末の〇〇〇〇の墓、

重要な家族である△△△△の墓など有力者の墓のようである。そもそも墓の中が彩色されているのは高位の人びとの墓である証拠であろう。ヴォルテッラなどより都会的である。

ローマの歴史では、エトルリア人の王が前6世紀に追放されたと伝えられており、この絵のような優雅な暮らしをしていたエトルリア人勢力を武骨なローマ人が優勢な軍事力で追い出し、支配権を奪ったのであろう。

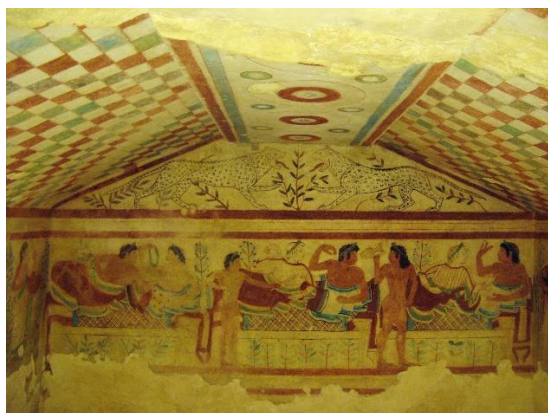
「フルートを吹く青年」などの壁画は色鮮やかで、当時の貴族の子弟の服装や履物、髪型などが良くわかる。カッコイイ美少年である。

お土産に買ってきた大きな絵は額に入れてパソコンの机からいつも見えるようにセットしてある。

3 ティレニア海に浮かぶ島 エルバ島

エルバ島と言えば「ナポレオンが最初に流された島」である。2012年夏、「コスタ・デ・トスカーナ」と呼ばれるティレニア海沿岸のリゾート地を訪ねる機会があり、沿岸の都市「サン・ビンツェンツォ」からエルバ島に船で行けるということで孫たちと一緒に行く。島の観光地の中に「鉱山博物館」があり、トロッコに乗って鉱山の中を見て回ることが出来た。様々な鉱物資源が採掘できた島のようなのである。

紀元前6世紀にエルバ島はエトルリア人の支配をうけるようになる。鉱物資源の採れる島として



タルクーニャの地下墳墓の壁画



タルクーニャの墳墓の壁画「フルートを吹く青年」



半島との間に交易活動が活発だったらしい。ヴォルテッラで見た鉄製の人形や武具などはエルバ島からの鉄で作られたのであろう。鉱山博物館で求めたパンフレットには鉱山で働く人々の絵があった。このようなイメージで子供たちにも分かりやすく教えているのであろう。

4 今もなお続く

エトルリア人の都市「ペルージャ」

ペルージャはウンブリア州の州都であり、エトルリア時代からの歴史を持つ都市である。日本では、知られていない都市であったが、サッカーの中田英寿がここのチームに所属していたことから、よく知られるようになった。

ローマに流れ込んでいるティベル川を遡って200km、標高490mの高さにある丘上都市である。2014年、この都市を訪ねた。ピザからフィレンツェ・アンコーナを経由し、ハンニバルが逗留したトラメジーノ湖を右に見て間もなく見えてくるのがペルージャである。旧市街地に行くのにはエスカレーターで昇ることになっている。(行ったときには工事中で乗れずタクシーで旧市街に入った)

この地にはもともとはウンブリア人が住んでいたが紀元前5世紀に高度の武力や文化をもったエトルリア人に征服され、その後、エトルリア人の都市として繁栄し、「エトルリア12同盟」に所属した。前4世紀からローマから攻撃を受け、前295年にローマに征服された。

前217年、第2次ポエニ戦争の際にカルタゴの

ハンニバル軍がトラメジーノ湖でローマ軍を破ったときには、逃げ込んだローマ兵を市民が手厚く迎えたという。

その後、「同盟都市時代」を経て、ローマの支配をうけるようになった。ローマの内戦期の末期、前41年、マルクス・アントニウスの弟がこの地に籠城したため、オクタヴィアヌス軍の攻撃が始まり7か月にわたる兵糧攻め、その後入城したオクタヴィアヌス軍により全市が焼き尽くされ、4万人の人口が数千人になってしまったという凄惨な歴史もある。(この内戦は10年後、地中海のアクティウムの戦いで決着がつき内戦は終結する)

ペルージャにはエトルリア時代の前3世紀に全長3kmの城壁が築かれたが、7つの門があり南の門はローマに直結していた。

北側の門は2300年前につくられたものが土台となり、その上にローマ時代にアーチの形の門が造られた。



エトルリアの城壁の上にローマ時代のアーチ

アーチ構造の建物はギリシャ時代にはなく、ローマはそれをエトルリアから学んだといわれている。古代都市の城壁の上や周囲にその土台を利用しながら中世に住居が出来たりなどし、歴史が幾重にも重なって見えるのがペルージャである。訪ねたときは城門は修復中であつた。右手の建物は有名な「語学学校」で世界中の若者が集まる。

イタリアを旅行すると、小高い山の上に集落がある風景をよく目にする。一体水の供給はどうなっているのかと思っていたが、丘上都市ペルージャで「井戸」を見ることが出来た。その名も「Pozzo Etrusco」（エトルリアの井戸）、深さ 37m。

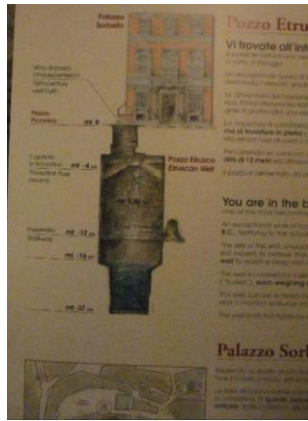
土木事業の得意なローマ人は「水道橋」を作り、遠方から「水」を供給するシステムをつくったことで有名である。ペルージャにもそのような遺跡があるというが、ローマ以前のエトルリア人は、防衛などの観点から山上に都市をつくり、そのため必要な地下水脈のある場所も見つけ、岩石を穿って町全体に供給できるような大きな井戸をつくる技術をもっていたのである。

地下にある「エトルリアの井戸」を見ることが出来て、感激した。地下の奥深く、灯りの光を受けて水面が光って見えた。

ペルージャには、周辺にエトルリア時代の墳墓もあるが、形式はタルクイーニャなどと似ているという。「ウンブリア国立考古学博物館」には「ペルージャの石碑」と呼ばれるエトルリア語の碑文がある。エトルリア文字はまだ解読されていない。残念である。

5 願わくば「聖なる場所」だった といわれるオルヴィエートへ

イタリアでは 20 世紀後半から、現代文明を批判する社会運動として「スローフード」運動が生ま



ペルージャにある「エトルリアの井戸」

れ、その延長線上に「スローシティ運動」がある。「人間サイズの、人間らしい暮らしのリズムが残る小さな街づくり」を目標にしている。その一つにオルヴィエート市がある。ペルージャと同じウンブリア州にありエトルリア人の歴史を思わせる断崖の上の都市である。

その町の西南の位置に発掘が続けられている丘があり、そこからは大きな神殿跡、各地につながる幅広い道、神像、アンフォラ等が見つかり、エトルスクの聖地であつたのではないかとされている。「エトルリアの 12 の都市同盟」の神官たちが半年に一度ここに集い、祭儀をおこなつたのではないかと推測されている。

紀元前 280 年に内乱を機にローマ軍が介入し、徹底的に町を破壊し、市民たちを虐殺した都市としてヴォルシーニといわれた都市があつた。その時滅びた都市でそれがどこであるか不明であつたが、それが現在のオルヴィエートなのではないかといわれている。断崖の町の地下にエトルスク時代の貯水槽跡、水を運ぶ地下道などが見つかつているという。

スローシティ運動では、土地の風景・地元の食べもの・ワインやオリーブオイルなど・・・を大事にし、小さくてもサービスのよいレストランやホテルを完備した街づくりをして観光客を呼んでいる。ローマからも近く、トスカーナとはまた違う美しい田園風景が見られるウンブリア州のオルヴィエートに行けたらいいな～、というのが私の願いである。

普陀山・天台山紀行

小澤拓美

最澄・栄西・道元らが、法華経・禅などを学んできた天台山にいつか行きたいと若いときから願っていた。各種史料に当たってもなかなかわからず、ただ想像するばかりであった。三井寺などで「天台山に行きませんか?」といった旅行のポスターを見たこともあり、「そのうち時間ができたら」と思っていた。60歳代になって「さてそろそろ天台山に」とツアーを探してみたが、これが全く見つからない。日本仏教界はどうしたのか、近頃その類の企画をとんと見かけなくなった。最澄の弟子、円仁は承和5(838)年に遣唐使と共に唐に渡り、師が学んだ天台山を目指したが唐朝廷の認可を得られず、まずは不法残留して向かったのが五台山である。(以下正しく「五臺山」とする。天台山は正しくも「天台山」である)その苦難の旅は「入唐求法巡礼行記」として、残してくれている。

五臺山には、円仁の研究者である阿南ヴァージニア史代先生の案内で2012年に訪れることが出来た。2012年5月15日朝に羽田空港を出発し、北京空港着後はバスで高速道路を飛ばし、夕刻には五臺山麓のホテルに入った。円仁が幾多の困難の末によりやく到着した五臺山に、円仁とほぼ同じ季節に着き3日を費やして五つの山頂寺院をめぐる事が出来たことは嬉しかった。

円仁は五臺山のあと首都長安に行き学ぼうとしたが、時の皇帝武宗の厳しい廃仏にあい、命ながら帰国の途についたのであった。在唐9年間の苦難の末847年帰国、のち比叡山延暦寺座主となったことはよく知られている。

では、円仁が憧れながらも遂にたどり着けなかった天台山とはいかなるところか。僭越ながら、慈覚大師円仁さんになり代わって、是非見てきたいと思った。



天台山国清寺観音殿より隋塔を眺める

国清寺は智顗によって始められ、その後598年に完成した。円仁も難を被った「金昌の廢仏」で廃止されたが、その後再建された。さらに何回もの天災・人災、近くは文革でも破壊されたが、そのつど再建された。六面九層の隋塔は、隋代に建てられたとされる国清寺最古の建築である。

2019年3月13日撮影

2017年に上海に行く機会があった。上海の繁華街を歩きながら中国人向けのツアーを探してみた。日本から上海までなら一人で行かれるから、そういう手があるかなと。いくつかあったが、少なくとも5~6人まとまらないと随分高いツアーになる。まあ、そりゃそうだな、と帰国後に知人たちに声をかけると、何人かまとまりそうな動きが出てきた。みんなで上海まで行き、あとは現地ツアーに参加しよう。そのうちツアーでも組もうかな、と思った。

それが、である。2018年秋に、いつも来る旅行社パンフをパラパラとみていて、ふっと手が止まった。なんと！日本発の天台山旅行があった。2019年の1・2・3月の3回の募集である。

声をかけていた知人たちにも紹介した。結局、私を含めて4名が申し込んだ。実は、1・2月の募集とも最少催行10人に満たずして中止となった。3月も、最終的に12人しか集まらなかったもので、小生ひとりの申し込みでは成立しないところであった。持つべきものは友なり。申し込みから出発までの4か月に集中的に天台山の勉強をし、同行の知人たちとの勉強会も開いた。

普陀山◆五体投地で進む若者

2019年3月11日(月)早朝、羽田空港集合。中国東方航空にて現地時間11時ころ上海空港着。貸切バスに乗車。杭州湾大橋を渡り舟山列島へ渡る。さらにいくつもの島々をめけて朱家尖島へ。普陀山の波止場から歩いて宿舎へ向かった。

12日(火)朝食後、路線バス・ロープウェイを乗り継ぎ、仏頂山へ登り慧濟寺に向かう。五体投地で進む若者が多い。2012年に五台山に行ったときは、数人の五体投地を見かけたが、すべて老人だった。ここは特別かもしれないが、「造反有理」などと言っていた「あの時代」が信じられない。ロープウェイを下り、海岸沿いの不肯去(ふこうきょ)観音院へ。円仁のあと、9C後半に渡唐した日本僧惠萼(えがく)が帰国にあたり持ち帰ろうとした観音像が動かなくなり残した場所、とのことである。「観音様も日本は嫌い」と漢民族の誇りを掻き立てるのだろうか、多くの参拝者がいた。路線バスに乗り港へ。帰りの船はまずまず快適だった。夕食のあと、ようやく天台山に向かう。宿舎は華頂山脈の南端にある赤城山(せきじょうざん)の近くにあった。

13日(水)朝食は見晴らしのよいレストラン。テーブルから赤城山が目の前に見えた。朝日に輝く赤城山を眺めながら、天台山の中心・国清寺に向かう。予習の成果があり、豊干(ぶかん)橋だ！一行(いちぎょう)さんの碑だ！隋代の梅だ！伝教大師最澄の碑だ！王羲之の好きな鷺鳥だ！などと楽しかった。境内の一番上にある観音殿横から眺めた「隋塔」は良かった。最澄ら日本から命がけで渡海した僧たちも、ほぼこれと同じ景色を眺めたと思うと、心熱くなるものがあつた。国清寺の住職が天文学者一行(いちぎょう)の来るのを予言したという「一行此に来たりて水(みづ)西に流る」の碑を見て、寒山・拾得ゆかりの寒拾亭をくぐり、一行の塔を拝む。一行が作った「大衍曆(たいえんれき)は、日本では764年(奈良時代後半)から861年(平安時代)まで使われた。整った曆としては、日本で使われた最初の曆

である。その後は、宣明曆(せんみょうれき)に代わり、その後、貞享・宝暦・寛政・天保と短期間で修正、1873(明治6)年に現在のグレゴリオ曆になっている。

森鷗外の書いた「寒山拾得」に出て来る庫裡を見ようと東の一角を覗いたら、「立入り禁止です！」と叱られたので、それ以上の行動はやめた。

国清寺を出たあと、山道用の小型バスに乗り替え華頂山脈を上っていった。かつて、多くの修行僧らが苦勞して歩いたところをスイスイ行くのは申し訳ない感じ。驚くことに、山の上のほうには別荘地が広がっている。日本出発前に、国会図書館地図室で明治末・昭和初の地図(日本陸軍の調査)を見てきた者には仰天である。

石梁瀑布◆滝の上の自然の石橋

石梁瀑布の拝観料は60元、季節によっては百元(約1700日本円)まじかよ！高い！ここの肝心なものは、「滝よりも、その上にかかる自然の石橋だ」ということが現地で良くわかった。その石橋を渡ったところにある中方広寺が、方広寺の中でも一番重要だそうだ。「滝に打たれる修行」を重んじる日本人的発想とちがうんだなあ。日本では、華嚴の滝の真上に寺を作ったりしない。あの国清寺の豊干橋は橋を渡るそのことが修行ということで、この石橋を模したのだろうか、と思った。

滝の横を上り、また少し小型バスに乗ったあと、山道を歩きはじめた。ようやく古代僧たちの気分が少し味わえた。大きな自然の石舞台が見える。天台大師・智顗さんが説法したという伝説の場所である。斜面に広がるのは茶畑。最澄が日本にもたらしたお茶の原産地と思うと嬉しい。天台大師智顗の弟子・章安菴頂の墓などに詣で、はるか下に高明寺を眺める快適な山歩きだった。

この山道を歩く時に雨でなくて、本当に良かった。また少しバスに乗り、智顗の墓所である智者塔院(真覚講寺)へ向かった。日本人の寄贈にかかる般若心経の塔を見たあと、室内にまつられている智顗の真身宝塔(遺体の上に建てられたとの塔)を拝む。その後、智顗を開祖とする高明寺に

移動した。高明寺では、大雄宝殿などを拝観。2011 発行の「高明講寺」写真集を 98 円で購入。大した資料ではないが写真は楽しめる。山をバスで下り、再び寒拾亭の門を潜りぬけ天台の街へ戻った。

臨海◆五鳳坊とはなんだ？

昼食後、一路南下して臨海に向かう。倭寇が荒らしまわったと言われる街、臨海。しかし、倭寇といってもかなり中国・朝鮮人が加わっていた、というのは常識

(朝鮮の史書に「和人はせいぜい二割位」とある)。臨海あたりは豊かであったろうから、海賊たちが荒らしまわるにはいいだろう。しかし、椒江の河口から計れば、蛇行を考えて 60~70 キロ遡らないと臨海にたどり着かない。日本で言うと室町時代中ごろの日中韓の共同賊たる倭寇はなかなかの勢力であった。

城壁の中に龍興寺がある。最澄が、中国在留中にもっとも長く滞在して学んだところである。臨海は、日本で言う「伝統的建造物群保存地区(伝建群)」で、古いものだけでなく、それらしい近年の建築もある。今回の旅のルートで、事前に日本語サイトは勿論、中国語サイトをあれこれ調べても全く分からなかったのが「五鳳坊」。現地ガイドの二人とも分からず、あちこち探し回っていた。ようやく探りあてたのが、倭寇と果敢に闘って亡くなった 5 人の英雄の碑であった。碑そのものは、ぼろぼろだった。

臨海から高速を飛ばし、また天台山のあたりで赤城山を見ながら、北上する。最後の宿は杭州。南宋の都であった臨安である。

西湖◆美女西施と范蠡

14 日(木)小雨けぶる中、西湖散策。西湖といえば、まずは西施である。多くの日本人は「象潟や雨に西施がねぶの花」と、あのフワッとしたピンクの合歓(ねむ)の花を思うところです。ところが、西施の「西」は、西湖の「西」とはちよいと違うようだ。臨安の街の西にあるから西湖。



芽柳や湖に手漕ぎの漁舟 菊子
旅行参加の村田菊子さん(友の会会員の句
2019年3月14日・小澤撮影

西施は、現在の招興近くで生まれ、二つの村にそれぞれ「施」という一族が住んでいて、西の村にいたから西施、だそうだ。なぜ、紀元前 5 世紀の彼女が有名になったかいうと、呉王に敗北した越王勾践(こうせん)の側近である軍略家范蠡(はんれい)が、呉王の弱体化を狙って献上した美女だから。呉王は美女西施に夢中になり政治をおろそかにしたため、国は混乱し、ついに越王に滅ぼされた。

これが、松尾芭蕉を始め日本人に知られるようになったのは後醍醐天皇の逸話も関係あるだろう。元弘の変に敗れて、後醍醐さんが隠岐の島に流されるときに、児島高德(こじまたかのり)が桜樹を削って書いた「天莫空勾践(てんこうせんをむなしうするなかれ)時非無范蠡(ときにはんれいなきにしもあらず)」です。流人になる後醍醐さんに対して「必ず還れるように働きます」と秘かに伝えた、という話である。

それはともかく、私達はなんと知っていることか。それまでの日程が晴天であり、この西湖遊覧の日が小雨とは最高だった。静かに小雨の降る絵のような湖畔をそぞろ歩き、湖を眺める飯店で昼食後、上海に向かう。上海発 16:25 の中国東方航空に乗り、羽田に向かった。

天台山が属する華頂山脈をもっと歩きかったが、団体ツアーではこんなところか。またの機会があれば、遣唐僧たちを想いつつ上海まで船で行き、天台県の街からはできるだけ歩いて主峰の華頂山頂(1250m)に立ってみたいものだと思います。

チベット仏教の寺院・聖地を訪ねて

—— チベット、ブータン、ネパール、モンゴル、南シベリア

増田克彦

宗旨替えに気を遣ってくれたし、親族からは異論も出た。

(2)

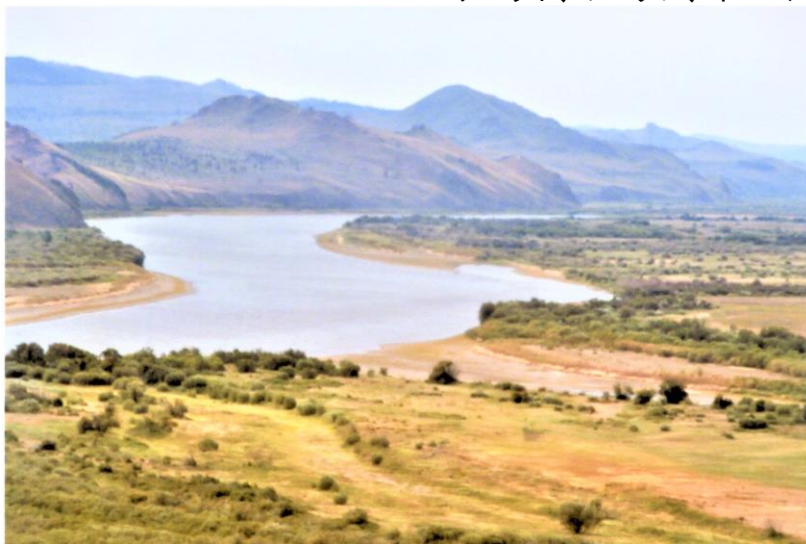
モンゴルには2004年8月4日から9日、全歴研の海外研修で連れて行ってもらった。ウランバートルとハラホリン。ネパールには

2005年10月19日から24日、国連機関に勤めていた姪がカトマンドゥで結婚式を挙げると言うので仕事の調整には手間取ったが喜んで出かけた。訪れたのは、カトマンドゥ盆地のカトマンドゥ、ボダナート、パタン、バクタブルと盆地の東35キロほどのヒマラヤ展望台として知られるナガルコットだけだから、ネパールを訪れたとは言えない。ブータンに妻の研修旅行で付きあったのが2015年8月24日から31日。訪ねたのは政治経済の中心であるブータン西部の、パロ、ティンプー、プナカとその郊外ノブカンという小さな村だけである。以前から行きたかったチベットへは2016年5月26日から6月1日。ラサとその近郊のみ。南シベリア・バイカル湖畔へは2017年7月31日から8月4日。バイカル湖は見たかったし、シベリア鉄道にも乗ってみたかった。モスクワから5900キロも離れたイルクーツクに流された1825年のデカブリストの乱に参加した人々の名残も見たかった。訪れたのはイルクーツクとウラン・ウデ。共に業者企画のツアーでの旅。いずれもが一週間にもならない極々短い旅である。

(1)

仏教についての知識、ましてやチベット仏教の知識があるわけではない。さりとて宗教に興味が無いわけではない。小さい頃から教会に通い、洗礼直前まで接近したこともある。歴史上のものも含め、イスラム教諸派、キリスト教諸派、ユダヤ教、ヒンドゥー教、ゾロアスター教、なおのこと日本は勿論、各地の民間信仰と言われるものには大いに興味がある。外国旅行の際には「仏教徒」としてはいるものの無神論者とは言いが間違いなく無宗教である。

我が家の宗旨は、現在、真言宗智山派。祖先の戒名に「誉」と「蓮」の文字が入っているところから、元々は浄土宗だったと思われる。以前の菩提寺は東叡山寛永寺の末寺。寛永寺の創建は1625（寛永2）年だから、浄土寺院あるいは天台寺院が寛永寺に取り込まれたか、擦り寄ったか。天台から真言へは、半世紀を超える年一回とは言え暑い最中の墓参がさすがにきつくなり、墓地を近くの高幡山金剛寺に求めたことにある。父親は墓は移すなど書き残していた。高幡不動尊の職員氏は



モンゴルとネパールについては2007年5月に上梓した『遅き春』に駄句と紀行文を、ブータンについては2016年7月発行の都歴研友の会「友の会だより」10号に載せてもらった。

計画性があったわけでは全くなく、結果としてチベット仏教関連の地を見て回ったことになった次第である。

(3) チベット仏教の世界

甚だ雑駁だがやはりチベット仏教について。当然とはいえ、ほんの少し眺めただけではその違いは全くと言って良い程判らなかつた。

640年頃チベットを統一したソンツェン・ガンポ（?－649）とその時代、7世紀に中国、8世紀にインドから仏教が伝播したと言われる。それらが民間信仰と融合、インド系仏教を中心としてチベット仏教が成立、吐蕃（7世紀－9世紀後半）の国家的宗教となった。吐蕃末、第9代ダルマの廃仏で衰微したが11世紀に再興。13世紀にはパスパ

（1235－80）がクビライ・ハン（1215－94）の保護を受けたことからチベット仏教はモンゴルから華北に普及。元・明に優遇される中、権力と接近して墮落。1409年、ツォンカパ（1357－1419）が論理的教育と妻帯や飲酒を禁じる戒律の厳しい僧院生活の特徴とするゲルク派を創始。以前のものをニンマ派と称し、747年頃インドから招かれた密教行者パドマサンバヴァの教えを奉じる。1073年、コン・コンチョク・ギェボ（1034－1102）が西チベットのサキヤ地方で創始した密教色の強いチベット仏教をサキヤ派といい、サキヤパンディタはモンゴルでの布教に成功、13世紀から14世紀初頭にかけてチベットの覇権を握っている。また、カギュ派は、11世紀にインドで修業したマルパ

（1012－97）のもたらした密教経典を奉じる。マルパの孫弟子タクポラジェが教義を確立、多数の分派が発生したが、このうち、14世紀から15世紀にはバグモドゥ・カギュ派が、16世紀後半にはカルマ・カギュ派がチベット政界で勢力をのびしている。16世紀、モンゴル・タタール部のアルタン・ハン（1507－82）がチベットを制圧してゲルク

派に帰依したことからチベット仏教は改めてモンゴルに移入されることになる。1642年、モンゴルの武力をバックにゲルク派がチベットを統一、ツォンカパの二人の弟子から出た化身僧ダライ・ラマとパンテェン・ラマが代々転生するとして、ダライ・ラマはラサに、パンテェン・ラマはタシルポに教権を立て、共にチベットの政教を支配することになった。

以下、チベット仏教の世界に大凡共通するものを幾つかあげてみる。その全てに写真を付けたいが、ページ数が嵩む。

・**仏像、仏画、寺院建築**。チベット仏教は実に色彩豊かな宗教である。イスラム教のモスクやロシア正教、仏教諸派寺院の外観・内装も見事だが、チベット仏教にはまた違った素晴らしく豊かな色彩と複雑なデザインがある。チベット、ブータン、ネパールと微妙な差があるものの、白・赤・黄・緑・青の五色と鳥獣、周囲の草木や土の色とデザインが取り込まれている。

・**タンカ**。曼陀羅。布地に描くことが多く、大規模な祭の際に披露される縦横50mものタンカもある。色の付いた砂で描く砂タンカもある。

・**タルチョ**。経典や仏像などが印字された旗。祈りが風に乗って運ばれるのだという。呼び方は地域によって異なる。ブータンではダルシン。幅50センチ程の薄手の長方形の布。ダルは旗、シンは竿の意。布の多くは白。基本的には死者を祀る旗である。本来108本立てるのだが経済的に無理ならばその限りでは無いという。竿を用いずに橋の欄干や家の軒下に吊るすものはルンタ。パロの国



写真1
ブータンのダルシン

立博物館で入手した土産用のものは白・赤・黄・緑・青の五色の布に経文、馬に乗った仏、梵字が印刷されている。用途によって色を使い分けるといだが、ダルシンは白、ルンタは五色が殆ど。五色のルンタは生きている者の幸福を願うもののように思える。

・**マニ車**。木製あるいは金属製の内部に経文を収めた筒状の回転体。大きさは様々。1回回すと中の経文を読んだことになるという。マニ車を回しながら建物を時計回りに回る。家庭には取っての付いた手回しのマニ車がある。

・**五体投地礼**。最も丁寧な礼拝方法。頭と両手・両膝を地に着け、うつ伏せになり、全身を伸ばし頭上で合掌する。起立、合掌、うつ伏せ、合掌、起立を繰り返す。敬虔な信者は五体投地をしながら尺取り虫のように自らの身長分ずつ進み、堂や寺院の周囲をまわり、何ヶ月も何年もかけて聖地ラサヤカン・リンポチェ（カイラス山）に向かう。苦行を積み重ねれば来世が輝く。洋の東西を問わず、現在でも、信仰は苦行を伴う。ポルトガルのファティマでは、膝を地に着け、にじり歩きをしながらバジリカに向かう人々の群れを見た。

・**葬儀**。鳥葬、土葬、水葬、火葬といろいろ。チベットでは、下層民は水葬、火葬は高僧。社会的

経済的地位によって異なるという。ブータンでは、一般的に死亡年齢2歳までは水葬、7歳までは鳥葬、それ以降は火葬。火葬後、額の骨を砕いて円錐形に固め、川の見える場所に置く。残りの遺灰は川に流す。子どもが水葬や鳥葬なのは、年齢がいておらず功德を積んでいないため魚や鳥に捧げ功德にという事らしい。

(4) チベットに行く

成田から成都へは6時間弱。成都市内を見学し夕食後成都空港から西寧空港へ。

2日目、西寧のホテルから車で湟中・タール寺（塔尔寺）へ。八塔、護法殿、大経堂、大金瓦殿、九間殿、遍知殿と巡る。その昔は4000人以上の僧がいたというが、現在は500人程。ツォンカパの生地建つ。

夕方、西寧駅で青藏鉄道に乗車。夕食と翌日の朝食は食堂車で。

2006年7月、青海省の西寧からゴルムドを経てラサを結ぶ青藏鉄道が完成。乗車時間22時間、標高が最も高い地点は5072m、世界最高海拔駅のタングラ駅は5068m。ちなみに成都の標高は500m、西寧が2275m、ラサ駅は3641m。病気ではないので高山病とは言わず高山反応と言うが、外国旅行で初めて医者世話になった。列車の中で配られた酸素吸入装置を使わなかったのがまずかったのか、点滴を打ってもらっただけなのだがそれでも小1時間気分が悪かった。ペルーのクスコ郊外タンボ・マチャイ（聖なる泉）辺りは標高3800m程。酒は飲むな、たばこを吸うな、大声を出すな、走るなどの注意を受けたものの何事も無かった。青藏鉄道が出来る前、ラサには航空機で入り、到着後は丸一日ホテルで身体を慣らす必要があったとのことだがさもありなん。

ラサはソンツェン・ガンボがチベット統一後、有力者の影響を避け、湿地帯だったこの地に政治中心地を置いたのが始まりという。吐蕃滅亡後はさびれたが、17世紀、青海省に勢力を張っていたモンゴルのグル・ハンの後押しを受けたダライ・ラマ5世(1617-82)がチベットを統一、ラサは再び



写真2 五体投地礼をしながらポタラに向かう男性

チベットの政治中心地となった。

4日目。ポタラ宮へ。ラサ西部のチベット語で赤い山と呼ぶマルポ・リの斜面に建つ。高さ115m、東西360m、南北300m、総面積41k m²。内部は1000を超える部屋・堂からなるという。1994年世界遺産登録。ポタラはサンスクリット語で観音菩薩の住む山の意。ダライ・ラマは観音菩薩の化身でもある。建設は7世紀に始まるというが、本格的にはダライ・ラマ5世が政教両面の権力を握った1645年かららしい。

五体投地をしている者が少なくない。現地ガイド氏は、金欲しさに五体投地をしている者もいるので喜捨はしない方が良いという。見学は決められたコースでなのだが、とにかく複雑。入口からとりあえず316段。上り下りが激しく、ガイド氏によると入口のところで入場を諦めるツアー客もいるという。

ジョカン（大昭寺）へ。ラサ旧市街の中心にある。650年ころの創建。2000年世界遺産登録。敷地面積25100 m²。ソンツェン・ガンポの死後、その菩提寺として建てられたという。ソンツェン・ガンポの妻、唐の文成公主（？-689）が持参した釈迦牟尼像、ネパールのティツン王女の持参した十一面観音像共にここにある。入口の手前には821年に立てられた唐蕃会盟碑。薄暗い中に十数の堂そして無数の仏像。ガイド氏からもらったカタと呼ばれる白いスカーフ状の布を仏像に投げかける

5日目。午前中デブン・ゴンパ（哲蚌寺）へ。1416年ツォンカパの弟子ジャムヤン・ジュチュエ創建のゲルク派寺院。敷地面積や建物の数等ゲルク

派寺院最大という。食堂と本尊を見学。午後。セラ・ゴンパ（色拉寺）へ。1419年ツォンカパの弟子ジャンチェン・チョジョエ・サキヤ・イエシエの創建。ゲルク派寺院。チベット語大蔵経入手のためインドでチベット語を学び、大変な労苦の末にネパールからチベットに入った河口慧海(1866-1945)もここで学んだ。明の永楽帝からサキヤ・イエシエに贈られた永楽8年版の大蔵経がある。セラ・ゴンパの塔頭の一つチェ・タツァンは教学を学ぶところだが、その東側の中庭では多数の僧侶が問答修行に励んでいる。砂曼陀羅を見る。

帰路は空路ラサから成都へ。成都に着き、久々のビールのなんと美味しかったことか。

(5) ブータンへ

国教はカギュ派の中のドゥルック派だが、多くの地域はニンマ派だそうで、ヒンドゥー教も少なくはなさそうだった。

タイ航空機で羽田からバンコク、バンコクで1泊。翌日ブータン航空機でコルカタ（カルカッタ）経由で標高2300mの世界で最も離着陸が難しいと言われるパロ空港に着く。

パロでの初日の午後、国立博物館とブータン最古の寺院キチュ・ラカンを訪れる。ソンツェン・ガンポはチベット統一後、魔女の力を封じるため、その身体の一部の108のツボにあたる場所に寺を建てたというが、キチュ・ラカンもその一つ、魔女の左足を封じる場所に当たるのだという。この話からするとキチュ・ラカンの創始は7世紀になるが、実のところは13世紀、ドゥルック派の影響下にあ

写真3
ジョカン（大昭寺）



写真4
砂曼陀羅





った寺院が始まりではないかと言う。三層の屋根を持つ堂が二つ。旧堂には釈迦如来を中心に幾つもの千手観音が安置されている。新堂は1968年の建立。

バスの中から500mはあるだろう絶壁に張り付くように建つタクツァン・ベルブが良く見える。タクツァン・ベルブはブータン人にとって死ぬまでに一度は訪れたい場所だという。虎に乗ってブータンにやってきたパドマサンバヴァが瞑想した場所で、彼が瞑想後土地の神々を折伏してこの地に仏教を根付かせたという聖地である。パドマサンバヴァがチベットへ帰った後もその弟子たちの巡礼が続き、長年にわたって多くの伽藍が建てられ現在の姿になったという。トレッキングにはなかなかの適地だそうだが、今回そのような余裕はなかった。

ティンプーから標高3150mのドチェ・ラ峠を越えてプナカへ。プナカ・ゾン（ゾンは寺院と行政機関とが一体となっている施設）は1328年に造られた小さなゾンの周囲に1637年から建設が始まる。多くのゾンが高台に造られているのに対し、プナカ・ゾンはポ・チュ（父川）とモ・チュ（母川）という二つの川の合流地点に建てられている。そのためプナカ・ゾンは火災や地震の被害だけでなく水害にも見舞われ、その都度再建・改築・増築が繰り返されてきたという。最近では1986年に火災、1994年には上流にある氷河湖の決壊による洪水に見舞われている。建物の中にはプナカ・ゾンの建設を始めたシャブドゥンがチベットから持ってきたという観音菩薩像（ランジュン・カルサ



パニ）がある。ドルルック派の開祖に由来する遺物で、チベット仏教全体にとって重要な像と言う。17世紀、チベットがこの像の奪還のために軍を派遣したが失敗。プナカでは毎年この時の戦勝記念の祭りが行われているという。

寺院やゾン、各家庭の祭壇には多くの仏像や聖職者の像が所狭しと飾られるが、赤い帽子をかぶるチベット仏教の開祖インド人のパドマサンバヴァ（グル・リンポチェ）が、2人の妻・チベット人のイシェ・チョゲルとネパール人のマンダラパを伴っている像も面白い。

吉祥紋と言ってよさそうな、魚（セニャ）、法螺貝（ドゥン）、宝瓶（ブンパ）、無限の紐（ベルベウ）、最勝幡（ゲルツェン）、法輪（コルロ）、傘蓋（ドゥク）などが描かれるタシ・タゲも面白い。外壁や室内の壁などさまざまなところに描かれる。

チベット仏教はヒンドゥー教の影響があるのか、民家の戸口、建物の四隅、村の入り口など様々なところに男根をモチーフとする彫刻や絵画が飾られている。パロから郊外に向かう途中、大きな白い外壁いっぱいに射精する男根が描かれているのにはさすがに驚かされた。

（6）ネパールの寺院

成田からバンコク。バンコクで1泊。翌日タイ航空機でカトマンドウのトリブヴァン空港。

ヒンドゥー教とチベット仏教が混然一体としていえると言いきなのだろうが、チベット仏教寺院は少なく、ヒンドゥーの世界と言った方が当たっ

ているように思える。

カトマンドゥ盆地で最も重要視される聖地スワヤンブナートはヒマヤラ最古の寺院といわれる。カトマンドゥ



写真7 スワヤンブナート

から西へ2キロ、丘の

頂上に白いストゥーパ。ストゥーパには「四方を見渡すブッダの智慧の目」が描かれている。15世紀イスラムの侵攻により大きな被害を受けたが再建。ストゥーパの手前、両側にはインド・シカラ様式の仏塔、右手にはカギュ派のゴンパ、裏側の巡礼宿の前にはヒンドゥーのガンガとヤムナーの像。寺院前の商店街には河口慧海を記念する銅版が飾られていた。

パシュパティナートはネパール最大のヒンドゥー寺院・インド亜大陸の代表的シヴァ寺院の一つという。我々はヒンドゥー教徒ではないため寺院の中には入れない。橋のたもとに火葬台（アエルガート）が4つ。遺灰はガンジスの支流パグマティ川に流す。

カトマンドゥは香辛料の匂いと土埃の中、人と車そして牛・猿・犬でごった返している。

古都パタン。15世紀から18世紀のマッラ朝の首都。ダンバール広場の東側には旧王宮、西側には17世紀から18世紀に建てられた幾つものヒンドゥー寺院、ここもマッラ朝の首都の一つバクタブル。カトマンドゥの東12キロ。煉瓦造りの建築群そしてその窓や庇の彫刻が美しい。

(7) モンゴルとチベット仏教の接触

モンゴルという地域を指す際のモンゴルは、お

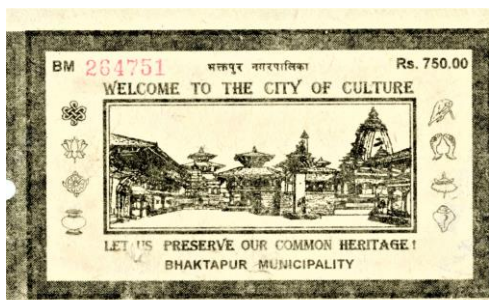


写真8
バクタブルの観光入場券

そらく、チンギス・ハン（1167?－1227）以降を言うのだろう。しかしこの地域でのモンゴル系民族の活躍は早い。従ってこの地域への仏教の伝播も古い。トルコ系もしくはモンゴル系と思われる烏桓（1世紀半ば－3世紀初頭）には既に仏教の伝播があったとされている。チンギス・ハンが仏教に触れていたかは定かではないが、中国やチベットからの僧が拜謁していたであろうことは容易に想像できる。1247年、サキヤ・パンチェンが蘭州に赴いたのがモンゴルとチベット仏教の接触の始まりかと言われる。この時サキヤ・パンチェンに同行した甥のパスパ（パクパ）がモンゴルでの仏教の基礎を築き、モンゴルの仏教はサキヤ派となった。1305年にはモンゴル語訳の仏典も出来ている。1578年、アルタン・ハンがゲルク派のソナム・ギャンツォ（1543－88）を招き、ダライ・ラマの称号を贈ったのがダライ・ラマの起源であり、モンゴルにゲルク派が広まる端緒ともなる。

成田からウランバートルまで6時間程。2日目の朝ウランバートルを発ってハラホリンへ。

3日目、ハラホリン見学。1235年、オゴタイ・ハン（1186－1241）が居を構えたオルコン河畔のハラホリン（カラコルム）には、現在何もないと言っても過言ではない。オゴタイ・ハンの宮殿跡や亀石も見たがマルコ・ポーロ（1254－1324）やルブルック（1220－93）の記述を想像するのは難しかった。街並みから少々離れたところに1586年、モンゴル・ハルハ族のアフタイ・ハンが創建したエルデニ・ゾーがある。ほぼ正方形の広大な敷地を白い仏塔状の外壁が囲んでいる。門は東西南北それぞれ一つ。中央にソボルガンという白いストゥーパ。その左奥に漢式の三つの寺院、総称ゴルバン・ゾーがある。その右に日々の勤行の場であ

写真9 エルデニ・ゾー、合図のほら貝を吹く僧侶



る講堂（ツォクチン）、そのまた右にチベット様式のラプラン寺。楼台に登り読経開始を知らせる合図の法螺貝を吹く僧の姿が印象的だった。エルデニ・ゾー（写真9）はサキヤ派の指導で造られたと言うが、ダライ・ラマがアルタン・ハンの曾孫に転生、ダライ・ラマ4世（1589－1616）になると、モンゴル人はこぞってゲルク派に帰依したという。

5日目、ウランバートルのチベット仏教寺院ガンダン・テグチンレンへ。1838年の創建。一時寺院としての機能が奪われたが1940年代に復活、1970年には宗教大学を併設、文化財の保護・修復運動の中心にもなっているという。

シャーマニズム、アニミズムと呼ばれる民間信仰はいたるところにある。仏教は民間信仰を抑圧・弾圧したが、融合・混淆もした。幾つものオボーに出会った。オボーは土地の守護神を祀り犠牲を捧げる場所。集落の中心地や湧水地などに各種オボーがあるようだが、多くは道標として山や丘の上に築かれる。休息場所でもあり、祭りの場所でもある。通過する者は、石や貨幣、馬の鬣3本などを献じ、周囲を3回廻る。

（8）南シベリアの遊牧騎馬民族

ロシアのアンガラ航空機で成田からイルクーツ

写真10 イヴォルギンスキー・ダツツァン



クへ6時間。給油の為ハバロフスク空港で1時間弱駐機。

2日目、バイカル湖とイルクーツク市内見学。

3日目、シベリア鉄道でウラン・ウデに。シベリア鉄道の乗車時間9時間少々。まあまあ満足。

4日目、最北のチベット仏教寺院イヴォルギンスキー・ダツツァン（写真10）へ。1948年に復興したロシア・チベット仏教の中心寺院。本堂、宿坊、宝物庫、書庫などが広い敷地に点在する。堂に背を向けてはならないと注意を受ける。マニ車が随所にあり、犬が闊歩し、大きな相撲競技場が隣にあった。ブリヤート共和国の首都ウラン・ウデからは車で1時間程。

ブリヤート共和国、人口約100万。ロシア人が70%、モンゴル系ブリヤート人23%とか。ツングース系など多くの民族が居り、全人口の半数がウラン・ウデに集中している。

チベット仏教がこの地に入ったのは17世紀。20世紀初頭には30もの寺院と1万人を超える僧がいたという。

イヴォルギンスキー・ダツツァンから「セメイスキエの文化的空間と口承文化」としてユネスコの無形文化遺産に登録されているロシア正教分離派セメインスキーの伝統を継承するタルパガタイ村に向かう。途中、タルチョの飾られたセレンガ川沿いの小高い丘に登る。モンゴル高原方面を眺め、匈奴以降の遊牧騎馬民族の興亡を想い、しばし感慨にふけた。（表題の写真参照）

（2020.9.20 記）

幕末の村における感染症とのたたかい

重政文三郎

江戸時代の感染症は、幕末期の江戸についてみると、

天保7年(1836)の麻疹

弘化4年(1847)の疱瘡

安政5年(1858)のコレラ

文久元年(1861)の疱瘡

文久2年(1862)の麻疹・コレラ

の大流行があった。日本史上では、奈良時代以来の疱瘡(天然痘)は繰り返して流行していたし、麻疹(はしか)もまた2〜30年の周期で流行することが知られ恐れられていた。ところが、コレラの流行は日本人には経験のない病であった。

これらの感染症の流行を、多摩の農村でどのように受け止めていたかについて、東京郊外の大田区、町田市小野路に残る旧家・小島家に伝わる『小島日記』を史料として描いてみたい。

小島家の日記は2つある。小島鹿之助(為政)の『日記』と父の角左衛門(政則)の『雑書』である。これは天保7年(1836)以来の幕末期、小野路村名主としての毎日の公用記録であり、農事日記であり、名主としての活動記録でもあり、さらに村人の生活のありのままを読み取ることでできる史料でもある。

天然痘と種痘

日本史の中で古代以来人々を苦しめた感染症に天然痘(疱瘡・痘瘡)がある。幕末の江戸では弘化3年(1846)や文久元年(1861)に流行した。小野路村では弘化4年(1847)に「上宿喜八倅疱瘡にて死す、鹿之助見舞」、「今日夕上宿源太郎倅疱瘡にて死」と二日連続で死者が出た。また慶応3年(1867)にも死亡者のあったことが日記からわかる。

疱瘡予防のワクチンはイギリスのジェンナーが発見(1796)した種痘が有名である。長崎オランダ商館へ「牛痘苗」がもたらされたのは嘉永2年(1849)、すぐに長崎から京都・大坂・福井方面にわたられ、江戸近辺でも蘭方医・伊東玄朴や各地の蘭方医の努力で種痘が始まった。

小島日記には種痘のことがしばしば登場する。小野路村には相模国上溝村の村医者・井上篤斎がしばしば来診していたし、また江戸の伊東玄朴やその弟子の往診もあった。

この村における種痘は、嘉永4年(1851)5月21日に上溝村井上篤斎のところへ「吉蔵娘」を連れて行って種痘を受けさせたことに始まる。わざわざ子どもを10キロも離れた村まで連れて行ったのには理由がある。「牛痘苗」つまり疱瘡に罹った痂(かさぶた)を種とするが、これは持ち運びが難しいので、「牛痘」を植えた子に出来た痂から痘漿(うみ)を取り出し次の子に「移痘」する。その8日後の5月29日には篤斎が村へ来て5人に種痘を施した。「相州高座郡上溝村井上篤斎と申す医師参り、八日目にて牛痘を左のものへ写す也」と日記にある。八日目というのは、この間に植えた種は「善感」してうまく植え付けられたか「不感」であったかを見極める期間で、「善感」の子から次の子に牛痘を「移す」ことになる。

6月7日には11人、14日には19人が種痘を受け、その後7回続き、40人以上が種痘を受けた。種痘の日の間隔がほぼ7日から8日になっていることが日記の記録からわかる。子どもから子どもへと牛痘を移していったのである。小野路村だけではなく野津田村や鎌倉郡中田村など他村からも子どもたちが来て種痘を受けているから、その子は村へ帰って次の子へ継いだのだろう。



井上篤斎碑 (相模原市上溝 宝光寺)

当時幕府は西洋医学を禁止していたので江戸で幕府公認の種痘が始まったのは9年遅れて安政5年(1858)、伊東玄朴らによってお玉ヶ池種痘所が設立された時からである。

その後、小野路村では種痘が引き続いておこなわれているが、文久2年(1862)に麻疹

麻疹と“コロリ”

文久2年(1862)6月から9月にかけて約4か月間の小島日記には、麻疹とコレラ(コロリと呼んだ)のダブルパンチを受けた記録が連日書かれている。村の感染症の流行とそれへの対策について、名主の日記をたどってみよう。

①流行病は江戸からやってきた

流行のはじまりは江戸から来た。江戸に住む領主の旗本山口氏の家が麻疹で全滅、若君のために村から乳母を出してくれと言ってきた。剣術の代稽古に来ていた沖田総司が麻疹に罹って帰っていった。御鷹匠一行に麻疹が発症したが村を通行した。江戸へ出て女中奉公していた娘たちが麻疹に感染して相次いで村へ帰ってきた。江戸町奉行所の調べで麻疹での死亡者1万8千人という情報が入ってきた。

さらに近隣の磯部村や木曽村など多数の村々の情報、とくに日野宿で160人の病死があったと書いている。小野路村では麻疹101人うち死者

11人が出た。8月になるとこれに覆いかぶさるようにコロリが村を襲い、11人の感染者うち1人の死者が出た。

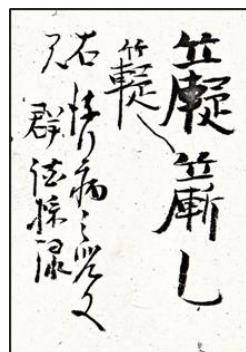
②祈りと悪気祓い

病原菌も治療法もわからないこの時代、村人の頼るのは祈りしかなかった。村の三役人は急きよ集まり相談して、寺から般若心経を借り出して小前百姓の末々まで各戸配布した。護摩焚きも行なわれた。

またコロリは野狐の仕業ではないかとされ三峰山の御犬札を取り寄せて病人の枕元へ置いてみたら少々穏やかになったという。

領主・御代官からの触れとして、「悪気下り」とされた日、「朝五ツ時に黒大豆八ツ、白米八ツせんじ家内中で吞む」という「悪気祓い」が行われた。この日は「上様にて御祈祷あり、民の安穩をお守りくださる、ご心配いただき恐れ入り奉る」と書いて、これが政策的に通達されたふしがある。

また『日記』には右図のような奇妙な文字が現れるが、「流行病の呪文」として入口に貼ることも行われたらしい。



「流行病の呪文」
『日記』安政5から

③村人を見舞、薬用手当

鹿之助も角左衛門もこの3か月以上の間、村に病人が出るとその名前を逐一日記に書き込み、病人のもとへ駆け付けて見舞い、治療にあたるという行動をとっている。

村で百姓八郎左衛門が小野路村で初めて流行のコロリの症状になった時、角左衛門はすぐさまその家に出向いて見舞った。そしてコロリの症状と診断すると薬用手当を施した。「芳香散二服を用い、からしの粉と温鈍粉へ入れ、酢にて解き、足の平へぬり付けたところ苦痛少々よろしくなり、かゆを少々食べるようになった」と日記に書いている。

この「芳香散」は、実は4年前の安政5年(1858)



拝島宿を流れる玉川上水分水（HPより）

に初めて江戸でコロリが流行した時、幕府が村々へ触れた方法であった。小島家に残るその文書には「桂枝・益智・乾姜」を調合して作ることが詳しく書いてある。角左衛門はこの指示に従って村人のために「芳香散」を調合し治療したのである。日本薬史学会の荻原通弘氏のお話によれば、安政のコレラ流行の時に奥医師に取り立てられた蘭方医伊東玄朴らが考案して幕府推奨の薬とされたもので、明治以後も日本薬局方に載っていたそうだと（『薬史学雑誌』46-2）。

芳香散ではコレラの予防効果はなかったが対症療法ではあった。コレラ菌未発見のこの時代、角左衛門の村人のための医療行為は、単なるまじないではなかったのである。

甲州道中日野宿や川原宿、拝島村でコロリ死者が多いことに着目した角左衛門は「その訳は通りの中を水流しそれを呑み喰いしているからであり、井戸水では左様のことはない」と書いている。ここには感染経路を見極め予防策を考えようとする角左衛門の冷静な目があった。

結語 ペリーが来航し日本が開国、そのために内憂外患の激動の時代に入り、安政2年（1855）には大地震が関東一帯を襲い、また安政5年（1858）にはコレラが猛威を振るい、文久2年（1862）には麻疹とコレラの大流行があった。疫病に対する予防医学は、天然痘（痘瘡）に対する牛痘法がその先鞭をつけたが、ペリー来航による新たな感染症（コレラ）の蔓延には、予防法がな

くならずもなかった。それだけに、種痘を広げていった蘭方医の努力は、次の時代を予告する活動であった。また、村の名主たちの、祈祷と呪術に頼るだけではない、村人に寄り添った感染症とのたたかいぶりのなかに、次の時代への息吹を、あらためて見つめなおしておきたいと考えた。

会員の著書紹介

宮崎正勝著『商業から読み解く「新」世界史
—古代商人からGAFAまで—』

内容 歴史のエンジンは本当に「国家」「政治」なのか？ 「商業」「資本主義」などをキーワードに世界史の大きな流れを一気につかむ。（「帯」から）

目次

- 第1章 帝国の出現を準備した商業民
- 第2章 商業帝国だったペルシャ帝国とローマ帝国
- 第3章 「飛び地」東アジアで官僚が主導した中華帝国
- 第4章 遊牧勢力を利用したムスリム商人
- 第5章 「大航海時代」以降に商業民が育てた海の資本主義
- 第6章 パイキング商人の末裔が推し進めた資本主義経済
- 第7章 ヨーロッパ商業を遅くした

環大西洋革命と産業革命

- 第8章 イギリスにしてやられたユーラシア諸帝国
- 第9章 アメリカ型資本主義の形成
- 第10章 ふたつの大戦で勃興するアメリカ商業
- 第11章 二五十年間続いたブレトンウッズ体制
- 第12章 インターネット革命と商人資本主義の再生

体裁 B5判 上製 320頁

発行年月日 2020年10月26日

出版社 原書房 価格 2500円+税

高原 将著 『私の海外旅行』

第一巻

ヨーロッパ個人旅行編その1

1974年（第1回）～2007年（第6回）

ヨーロッパ個人旅行編その2

2016年（第7回）～2017年（第10回）

第二巻 インド編

1982年（第1回）～2020年（第5回）

体裁 A4判並製 総ページ数346

カラー写真1300葉余 私家版